人権・同和教育シリーズ168

「人権文化のまちづくりを目指して」～旭志ブロック活動～

問い合わせ先　人権啓発課
☎0968（25）7209

旭志ブロックでは、区長、自治公民館長、民生委員・児童委員、人権擁護委員、女性の会、保・小・中学校職員、PTA、運動体、行政職員を会員として「旭志人権文化のまちづくり協議会」を組織しています。学校・家庭・地域社会が一体となって、人に優しい人権文化に満ち溢れたまちを作ろうという目標のもと活動をしています。

小中学校の人権学習に参加

旭志小学校の公開人権学習を参観したあと、参加者と意見交換を行いました。ほかにも、旭志中学校で中尾有沙（なかおありさ）さん（車いす陸上選手）の講演「夢への挑戦」を聴いたり、旭志小の人権フェスティバルに参加したりしています。自分たちの人権意識を高めながら、子どもたちの成長を見守るいい機会になっています。

視察研修

菊池恵楓園や福岡県人権センター、水俣病資料館などを視察し、さまざまな人権問題について研修してきました。昨年度は、障がい者の人権について学ぶため、八代市の認定NPO法人とら太の会の協力の下、『八代とら太の家への学びの旅』を実施しました。参加者からは「利用者の皆さんが楽しんでいて、笑顔が印象的でした」「不登校の子や仕事に行けなくなった人が、とら太の家でエネルギーを蓄えて学校や職場に行けるようになった話を聞きました」「スタッフも誇りを持って働いている職場で、人として互いに尊重し合う仲間づくりを感じました」などの感想が寄せられました。

住みよいまちづくりモデル地区活動

昨年までの「人権の花活動」と併せ、今年度から「住みよいまちづくりモデル地区活動」として三つの区をモデル地区に設定し、それぞれの区でミニ人権講座などを企画、実行していきます。

人権標語入賞作品と、人づくりまちづくりなかまづくり講演会

旭志小・中学生やおとなの部の人権標語入賞作品を旭志地区の全戸に配付し、人権尊重の思いを各世帯に広めています。

また、毎年行っている人づくりまちづくりなかまづくり講演会では昨年度、くまもと障害者労働センター代表の倉田哲也（くらたてつや）さんと美穂（みほ）さんに、違いを理解し認め合うことのすばらしさを語っていただきました。参加者からは「違いがあるのは当たり前なんだという社会をつくる一員になっていこうと思いました」という意見が出ました。

足でパソコンを操作し話す哲也さん

美穂さんが「子どもたちには、差別のない社会で生きてほしい」と話をされたように、旭志ブロックでは、これからも感性を磨き、人権意識を高めながら、差別のないことが当たり前になるような人権文化のまちを創っていきます。

韓国発見シリーズ69 こんにちは金（キム）です

国際観光マネージャー
金相廷（キム サンジョン）

韓国料理はいつから辛くなったのか

現在は日本でも、辛い韓国料理を好きな人たちが増えている。

韓国ではいつから辛い食べ物、特に辛いキムチを好むようになったのだろうか。一般的には、日本から唐辛子が韓国に伝わったのは18世紀中頃。それまで薄味だったキムチに唐辛子粉を使用し、それ以来辛い食べ物を好むようになったといわれている。この説の起源について、最近の学問的根拠に基づき書かれたある大衆文化評論家の記事が非常に興味深い。

韓国人が「これほど」の辛い物を食べるようになったのはそれほど昔のことではない。2015年韓国食生活文化学会誌に掲載された論文によると、1937年から2014年までの料理の本や新聞、雑誌などに記された白菜キムチの調理法に、その変化を見つけた。

白菜1株当たりの唐辛子の平均使用量は、1930年代に5・75グラムだったものが徐々に増え、2010年代に至っては71・26グラムになっていた。なんと12倍だ。農林畜産食品部（省）のデータでは、国民1人当たりの唐辛子の年間消費量も1970年の1・2キロから2010年代には3キロ以上に増えている。

なぜこんなに辛くなったのだろうか。国立民俗博物館学芸研究員の2009年の論文解釈によると、辛い味が大衆に拡散した時期を1950年代と見て、「朝鮮戦争、貧困と飢餓のストレスで辛い味を求めるようになった」と指摘する。唐辛子の辛さが中毒症状とエンドルフィン効果を出すのだという。

つまり「辛い味」は、韓国人が朝鮮戦争以降経験してきた非常に困難な生存闘争の歴史と軌を一にするという事だ。つらい時代の親たちは貧困を子どもや孫に残さないために孤軍奮闘し、辛さで少しでも憂いを忘れ、再び生活戦線に飛び込んでいったのだろう。「辛い味」は、つまり血と汗の味だ。

事実、飲食業関係者は、韓国経済が芳しくない時に、辛いメニューがよく売れるという。今、韓国では最も辛い「チョンヤン唐辛子」でも辛さが足りず、カプサイシンを使った激辛のトッポッキを買い求める人が多い。この指標こそ、今の韓国国民が受けているストレスに対する「正直な」指標ではないだろうか。